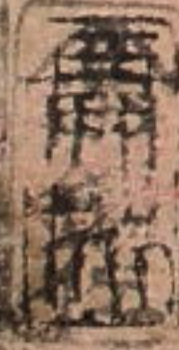


梅園雜話

上



511
1
^ 13



明
卷 511
卷 1-2

13
511
1-2

東都梅臚主人著

梅園雜話

一名讀新齋夜話



梅園雜話序

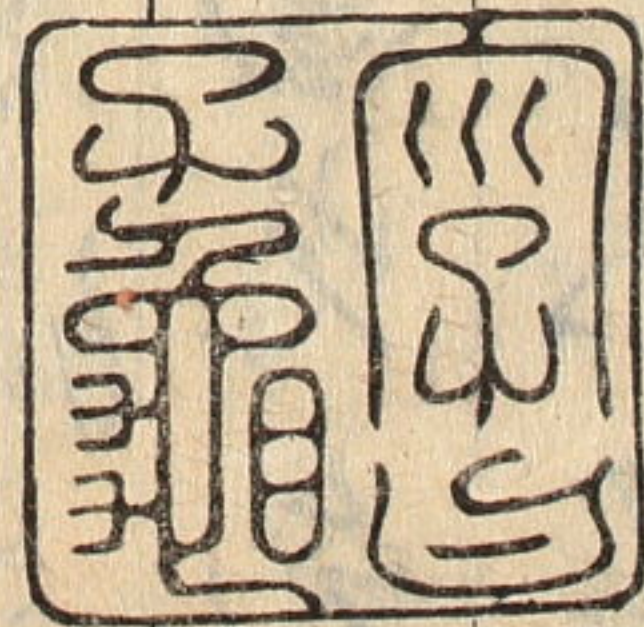
梅臚主人若及之執也
留英書紀行札其有在
更勅尚書之心蓋編以
昔清有冬一日書與來
來請上之未主人治籍
之天子喚而治聖之言

人嘗見不棄木也棄業
必有請者即并卷就中
昔報要錄治老病云華
隨念到繁結如畫其逸
柳函懷如此畫共因桂林
一枝耳 予擊節為
觀心之類如枝後事

道以氣序子子之海不
數非其人亦許 曰先乞
家毛序可編家美已
道各當立於此未嘗不
儀此子以也不及為之
或或類子勿城也其潛
言出清柳 跋韻詞著

序一
序二
其老渾以海通家之
云尔

朱正致



梅園雜話序

蓋聞昔在王者立裨官記閭巷風俗細碎之言以助政教焉所以小說不可不存也方今國家融朗之化浹於海內人之温飽安佚樂其業然昇平踰百

年之久稍失淳實之風浮靡成
俗講張為習姦偽攬挾無所不
至固勢之所使然矣梅龍先
生之於此篇有慨然所感而起
也務望事情必歸忠誠其用
心深厚可謂閭里之善教也

先生世仕

朝為子辟之士性溫厚種澹
絕不為貴介容素有王長史
癖頗曉茗理之善和歌出文
入武旁綜衆藝其才洵不可
測也已世傳羅氏為水滸傳

懷人之心術其子孫三世皆
啞豈可不慎哉

戊戌季夏松石道人書于三
畏齋中

梅園雜話

東都梅隴館主人著

條目

卷之一

一 蕉堅道人細川右典厩と貶す

附 妓女但馬籠鳥沢放す話

二 浪華の五子父の命と贖ふ事以訴

卷之二

三 賣茶翁再坐更うりさ許小語まじり
四 乞丐乃婆梅若太夫こつがい伏う詰づ
五 吉野の道世者よしの依川田よしかわ歌うた評ひらす

卷之三

六 伏水ふしづみ妓女ぎよ号竹遊女たけあそびの極たぎ伏ふ知ち

附 西翁男女對さいう斃あ乃可な否ひ論ろんす

七 匡官某くわん劍相けんさう并な七しち日にちの支象ししやう以い難なん以い

卷之四

八 奥州おくしゅう白河山中地しらかは仙墳せんぼんの來由らいう

九 三光院殿再さんこう嵯峨さあが乃草な序しゆと訪まうふ

卷之五

十 一品いっぴん法親王ほふしん寺門ていもんに道災みちわざ以い知ち修しゆふ

十一 農夫のうとの信義しんぎ公廳こうていと感かんと心こころ

其二

條目終

梅園 雜話卷之乙

一 蕉堅道人細川右典廐と殿す

曆應年中洛西小天龍寺建立ありて夢窓国師住山
 一玉ひ大樹連板の面々麾下の諸侯に至り迄踵とわらひ
 糸詰し或ハ僧堂の法と聽或ハ丈室に禪と糸下筆絶
 ぶよりが國師示寂の後ハ法乃をも之風流をなす一法の心
 地す今山中に袖子の故糸止靜の住来はしちせり細
 川右馬頭頼之ハ篤實乃君子ありて猶政事ハ餘暇は
 禪味と甘んじ蕉堅道人と師として向上の一路と窺ひ

常不止は此蘭若に諸人の道人の禪窟に近づきて玄以
談ト幽と仰じ。應永の始一日頼之來て結ひて法要
の商量事はくり。寒温乃贈答して頼之中出らる。い
柳宮乃御繁榮日増て一天下徳風は偃てやれり。
せん。うわく人々當世子義持君以十歳より五か。才智
世よ起え器量あふ奉止見くを結ぶ。誠は未だ
き御代まで年と累て千と志進人と仰。ゆると諸れを
ハ。師も眉乃霜と拂ひ。欣然として丈夫を海内の大幸なれ。
君の御性徳とハヤかう。執權尊大の御忠勤も見えて。
と悦びしは事よを。儲よ世子君いなり。乃智まらるん

と向りし。六頼之謹て膝と座し。たゞの聞しめを。春
の頃高麗国より船来せし。鸚鵡と云鳥と九列あり。春
者めを。い鳥は自餘の畜ふ。うて。う人諸ふ。且鳥
獣の写もよ。志似ゆる。鶺鴒能言とも飛禽よ。ふ
けと禮記も。其外唐詩も。及ぶ。生らん
と。事か。り。物。私の家。何人も。物不
以。下官。沙。初。雅の。慰。も。と。世子君。奉り
一。珠。外。又。愛。思。り。架。よ。繁。ぎ。て。何。も。ひ。に。或。朝
い。り。る。その。足。皮。の。切。ら。つ。と。知。を。侍。臣。達。の。迷。戸
と。り。郭。揚。か。せ。る。鳥。容。易。く。飛。を。出。あ。は。と。進。出

ふんも 翔まうとて登りて 行末をたんと送るに成ぬ
おも 世子君の法秘をうひ 日本に地ふし物とあり名馬と途
しつ事。ひひとやげん事とあり事とあり事の習性
ぬい 苗後の考。既又自害を及りしとあり。あつりの年老皆
と 宥め磔死するもそ鳥の肉づきた非唯公昔に任を
めそ 思ねしく 世子君に。事具を許し。良も思惟
あつ せける。彼馬千里の蒼海とありて唐古へゆり。事
後生うまひぬ。十とあり近習の年老。否たや。ふらり。集
た後 飛行ぬり。船来とありた。こらへも飛来ぬり。
その事か。た。愛より彼方へも飛去ぬり。わとあり。

啓し。て。誠。小。志。を。集。小。志。知。ま。波。濤。と。我。く。う。之。し。
さ。め。を。日。本。國。に。留。り。う。ん。日。本。國。に。我。は。國。を。ま。は。差。の。祭。と。放。
れ。て。途。中。を。惜。し。ま。う。ん。何。某。さ。を。恐。
へ。居。つ。あ。迷。く。出。て。見。奈。ま。の。法。定。は。高。人。の。蘇。生。の。お。
り。ひ。と。か。し。と。外。慮。徒。迫。習。の。人。も。も。の。寛。仁。と。感。し。を。
ま。ぬ。何。方。未。頼。り。も。賢。慮。よ。て。頼。之。等。の。知。命。と。も。る。歎。ま。
る。及。ひ。難。く。も。や。信。ま。し。と。流。し。語。り。を。ま。道。人。優。美。
して。苗。志。学。も。満。ち。ま。り。ぬ。心。り。ゆ。近。し。つ。る。人。の。患。
と。察。し。ぬ。し。事。も。が。び。な。ぬ。成。ま。り。と。て。異。國。へ。ゆ。り。ぬ。と。
る。れ。と。尋。ね。ひ。し。ゆ。む。づ。ひ。に。深。く。感。し。ゆ。り。ぬ。今。執。権。乃。

中事と寝後して。身しりひひりつゝの。時過差の
る。に聞え侍る。千里の蒼海と裁て。人ひひりつゝの。時過差の
せり。若くは。國ゆり。治定。近。人罪あり。れ
ゆる。た。人。國。會。鳥。一。玉。ぶ。さ。り。國。は。鳥
ら。惜。一。國。ゆ。惜。と。ある。法。も。弘。ま。る。弘
の。ゆ。ゆ。ゆ。幼。稚。の。ゆ。簡。は。友。社。の。國。政。と。も
は。ゆ。は。未。可。る。ゆ。ゆ。中。一。珍。禽。奇。獸。國。の。育。つ。ゆ。ゆ
外。典。の。ゆ。ゆ。見。え。ゆ。ゆ。唯。述。一。苦。一。ゆ。ゆ。宣。ハ
ん。最。後。と。ゆ。ゆ。ゆ。怒。と。て。獻。と。ゆ。ゆ。方。は。ゆ。ゆ
か。ゆ。ゆ。ゆ。に。ゆ。ゆ。ゆ。候。是。ハ。樹。下。石。上。の。淫。屠。氏。の。不。問

よて。利。世。安。民。の。家。ハ。用。ひ。終。り。と。き。ハ。知。は。り。て。も。兼。て
佛。世。不。二。乃。道。理。ハ。接。心。し。ゆ。と。底。意。を。残。さ。ぬ。中。ゆ。ゆ
宣。あ。ま。を。頼。之。ハ。垢。潔。の。程。と。慚。愧。一。と。黙。と。と。居。ら。れ。ゆ。ゆ

附 妓女但馬龍鳥と放つて話

道人斯て侍者。命じて典廐。茶と呈せ。温然として
宣つ。今に法物。浴よつきて。あひせり。事。ゆ。り。負。道。若。り
一。諸。國。遍。散。して。根。泉。の。沙。界。と。通。を。ゆ。り。小。を。白。ハ
伏。水。より。平。深。く。出。く。殊。々。草。界。け。と。遠。里。小。野。の。茶。店。と。腰
巾。掛。て。休。よ。ゆ。と。亦。と。愛。夜。旅。ひ。一。女。樂。人。多。く。付

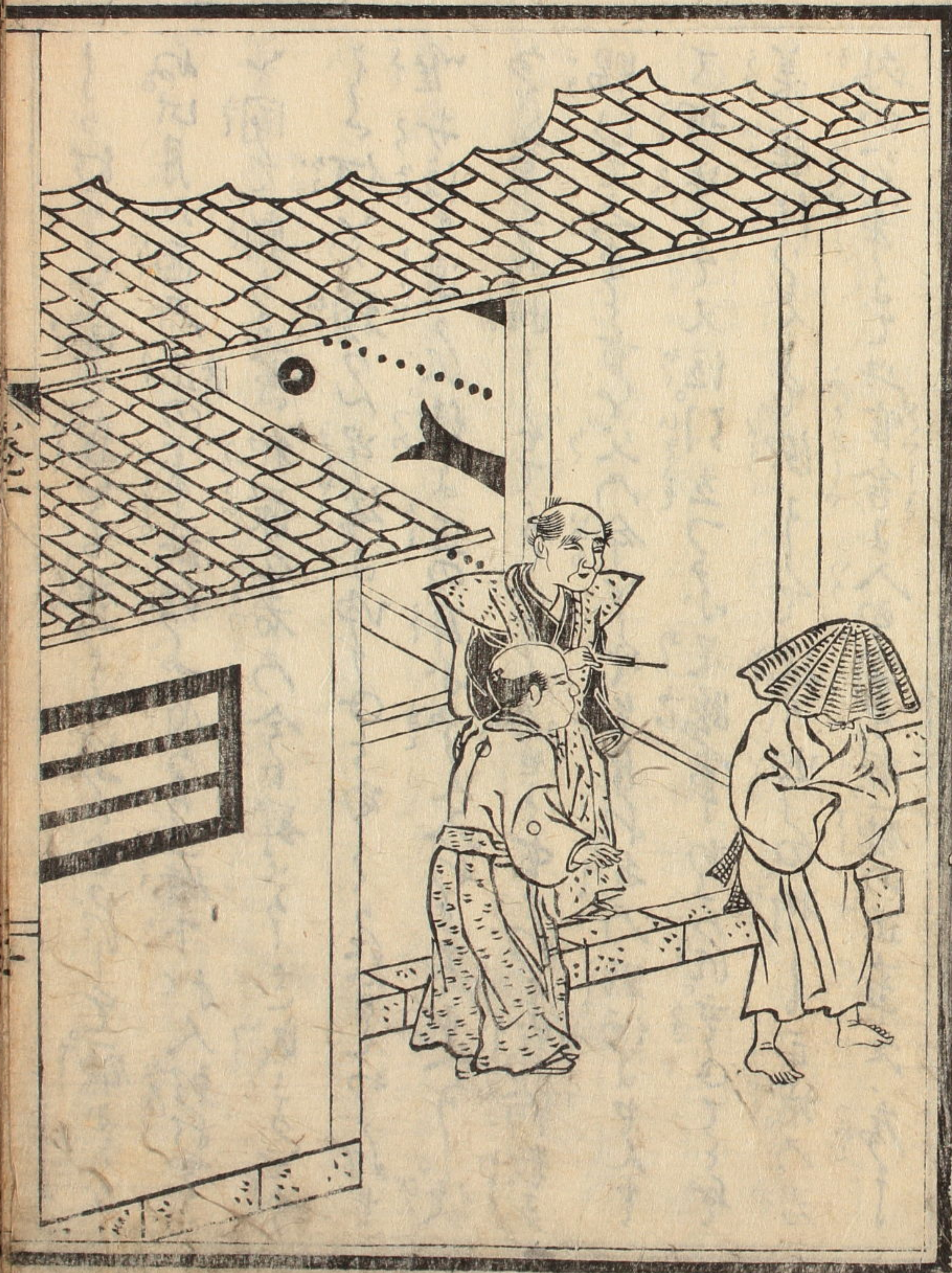


副て通ると。世より皆く由て送る。何れも。めておし。世の人乃石祥なり。茶店のわりの男詰て。興ハ世所の乳子に但馬とつる遊女の人。又幸や。今伴のわらを。因のおは。三世了達の。但馬西国節の豪富乃人。客にて。人國へ行て。又。と。玲ら。美しき。一番。唐土の。賞。て。

一日二日。何れも。籠の戸を。用て。彼。大。一。目。世。情。

往來し米穀雜品と運送して業とす者多し船は家
 て行者と沖船頭と云家は居て指麾する者と居船頭と云
 遠々ぬ世の事と云。堀江橋町は年頃住する太郎兵と云
 のは彼居船頭なり。是は屬する沖船頭ハ新七と云り一年
 新七は課て出羽の秋田へ行て米穀許多積て運賃取て
 浪花は歸ると云るは暴風波瀾と云て舟と大洋は漂は
 しの橋と折檻と碎て辛うして助ると云り。新七思ふ
 こゝの難船十死と出て一生はゆき。程幸は米多く残
 りと云とも。是人の知るは非。有のまにやと云るは賄ひ
 船も補ふかと費多るべしと。米皆海底は没するは

謀か。密は金銀は換へ船と水船うて浪花はゆき
 夜は入太郎兵の許は至り罪懼しなく身ひのり。金
 許多取出て是納めはと云。太郎兵倅事するは、
 固揚震の賢いあり。暮夜知りのありと云ひ。成り
 くと渡すかと云。深く臨し。相人と云りて水船とも賣て
 其他の公法はゆき。事偷ぬ。米主怪しと云事ありて
 ぞと探索て獲ると云。浪華の廳所小訴出たり。は
 新七のせと云。に。く。は。行方か。居船頭めと云
 太郎兵空獄と云。まぬ。太郎兵は五人也。姉の名ハ伊知年
 十六。二女。美。幾。十四。二女。も。久。八。次。幼。女。也。六。つ。お。は。長。太。郎



しつぱくして聞て我も加つてあまきつたて。廳（いん）おさる
ぬ。月（つき）の西（にし）乃正（のしょう）の事執（しやく）終（しゆう）ふ月（つき）なり。廳（いん）下（げ）れ人（ひと）形（かたち）おさる
と聞（き）て。斬（き）るべき犯（がんにん）罪（ざい）の者（もの）乃今（けふ）自（みづか）肆（し）さうと成（な）らうと今
も何（なに）も預（ね）らん早（はや）速（すみ）くゆりあへりなすえわらわ
唯（ただ）お位（ゐ）で退（ひ）るは終（しゆう）よ正（しょう）の耳（みみ）ふゆえ入（い）れせんまじり。後（ご）
あま事（こと）さる物（もの）とせてうすうゆせとあまのむすむす。寶（たから）輪（りん）教（きやう）多（た）
賜（たま）ひて之（これ）をさる父（ちち）乃命（いのち）とせなれお乃財（さい）何（なに）せんせ
て押（お）返（かへ）して又（また）返（かへ）り立つる不足（ふそく）踏（ふみ）事（こと）あつた。まじりて
兼（か）諾（だく）法（ぽう）はるえとて漸（おだ）くして送り出（だ）す。折（せ）しも司（し）城（じやう）乃君（きみ）
外（ほか）の公（こう）事（じ）も此（この）官（くわん）舎（しや）へ入（い）り。事（こと）有（あ）。廳（いん）の正（しょう）事（じ）又（また）序（ついで）なり

今日（けふ）も人（ひと）表（あ）る預（ね）らんをゆりつとせ。此（この）物（もの）は有（あ）り。
子（こ）也（や）聞（き）て。臣（しん）よ不便（ふびん）の事（こと）。明日（あした）出る出（で）て。親（おや）の真（ま）
傷（きず）厚（こう）薄（はく）弘（こう）明（めい）をむとて。翌（あした）日（ひ）司（し）城（じやう）の君（きみ）東（とう）乃正（のしょう）も西（にし）
の官（くわん）舎（しや）へ集（あ）ひ。町の長（ちやう）お人の若（わか）と連（つ）て出（で）る。庭（てい）上（じやう）へは
荊（けい）鞭（べん）鐵（てつ）杖（じやう）柵（さく）械（けい）枷（か）鎖（さ）とさう。並（なら）斬（き）る。刑（けい）斬（き）らん。の
方（かた）おそそ。命（いのち）は跪（ひざ）居（ゐ）り。あ。汝（なんぢ）は。親（おや）の。命（いのち）を。さ。事（こと）なり
命（いのち）よ。う。ん。と。云（い）ふ。再（また）會（あ）ひ。つ。と。し。親（おや）の。命（いのち）を。さ。事（こと）なり
等（ら）と責（せ）叙（ぎょ）して。借（か）り。つ。と。し。違（ちが）ひ。人（ひと）事（こと）。各（おの）づ。か。に。さ。事（こと）なり
さ。父（ちち）殺（ころ）す。相（あ）見（み）ぬ。も。異（い）なり。事（こと）か。一（ひと）事（こと）なり。い。ち。
し。ゆ。て。中（ちゆう）事（じ）つ。も。神（かみ）を。極（ごく）。ゆ。り。ぬ。お。返（かへ）す。と。い。ふ。

唯しをよとて。廳前を引遇する。親を抱き。親
と捧る。中して。歡喜の涙。沙上の漳。と。うの。東西の廳
伯より。ゆめ。大小の官人。見ると。聞と。ゆめ。皆中。と。沾。子
事か。是。志。か。清時の。御。惠。堂。庸人の。言。致。は。辱。く
せん。彼。五人の。誠。と。眞。の。器。なり。聖人の。語。と。聞。ふ。と。い。下。の
道。は。天。理。と。て。周。の。聖人。の。心。を。叶。つ。る。好。学。は。君。子。に。い
て。感。慨。う。ん。の。有。り。と。い。ふ。

三 賣茶翁再び坐叟の許小語る

賣茶翁は往一年坐叟が許へ入りて一面よりをばい
莫逆の中と成。花晨月宵多き。炸辺に在る。或時ハ詩歌ハ
諸君。の。心。に。茶。事。の。傷。に。も。趣。向。上。の。意。を。よ。て。誓。古。と。す
つ。も。香。多。け。建。む。坐。叟。も。折。く。は。見。と。も。色。の。名。家。は。は。く。す
對。一。巧。翁。の。何。と。思。ふ。ゆ。め。只。思。に。茶。を。じ。ぶ。り。ゆ。め
進。從。も。口。小。任。て。語。ゆ。め。の。心。を。さ。さ。り。ひ。た。ら。ぬ。家。傳。の。心
け。も。恆。の。事。有。り。推。疑。い。も。多。く。夫。の。心。に。茶。事。ハ。際。機

應慶の作意ありて功者の見見に幾度もすくゆる。入
事ふくまふ代々の門外に今箱乃きこもて、謙退のま
て更なる益とゆるも、必而従の心も受て直諫し、
さもふくは、以て来て、顧みし、云い、云い、云い、
し事し、あり、一日或人の年満と賀して更なる茶を
有に、さも、賣茶茶の勝ひ、ありて出入と助け、
望も、白も、事、ありて、何れ、治る、更、昨日、茶事、
し、六、為、若、さ、あり、多、た、非、と、夫、地、例、の、希、
か、く、云、五、と、責、し、六、第一、二、夜、は、出、逢、ひ、も、
着、む、い、一、事、扱、へ、了、む、む、官、服、回、事、の、礼、服、
も、再

遍、よ、く、く、黄、無、垢、り、く、す、ね、玉、り、日、出、さ、る、一、
の、焼、物、も、中、く、ま、い、ゆ、鯨、の、年、打、内、余、と、止、り、
羊、魚、も、そ、ろ、ろ、か、く、さ、い、ハ、枝、葉、も、あ、い、玉、り、
達、ハ、斯、の、く、く、西、い、く、何、と、袋、も、さ、の、ま、い、
柿、の、ま、い、厭、ひ、越、と、栗、と、菰、茹、と、一、の、盛、入、
繪、も、云、い、の、い、か、ゆ、る、ま、と、夫、と、厭、ひ、の、つ、
福、壽、と、い、つ、御、一、曲、堪、笑、軒、の、行、年、書、
何、と、中、ま、ま、也、と、い、く、福、壽、に、末、を、
ハ、調、伏、の、會、人、と、い、く、是、候、も、私、乃、考、
沙、名、家、一、射、と、過、南、と、免、一、の、又、
第、二、は、鯨



らぬ思世の稼樂を觀金と名を争ひたる。殊に當時の大夫
 若くし一々之家業は志深く、と藝は精神を加ふる
 或時信別と領し、も侯家にて家督の品級に能く一
 門元家中に及り、領する民もまた芝居とやうに
 見せしめ給ふ。その日梅若の本賊舞あづかる。上は向
 事次第の舞あづかる。才一の仕觀と貴賤息と凝して見
 物するに、さうくもさうく列の舞の踊りてその梅若と見よ
 の芝居乃ちうちよ何方中に入り、おら本賊の列に
 てさうくさうく舞の舞の踊りて、別一領知官の役人
 いはけい。何れもさうく舞の舞の踊りて、別一領知官の役人

大守と云く、の役人を命をさす。昨日芝居のうらな能と
 うらな、奇怪の事なり。巖は論議せむその人、起るも
 未下賤の者なり。事なり。場なり。身なり。家
 督祝儀乃故障なり。思はれぬ。てさうく。但梅若大夫へ對し
 甚失礼なるを。定式謝礼の使者。口上と添。昨日乱舞の内
 失禮の細と申出。のゆり。驚入の領。の百姓。舊例
 て大勢見物中。有る事。の。田舎者の。骨。奇怪。乃。至。の。勢
 せえ。の。當。の。そ。と。慇懃。は。演。の。舞。梅。若。情。て。謝。儀
 と。評。言。の。能。と。識。の。若。何。分。御。威。光。と。以。は。穿。鑿
 下。さ。り。執。儀。の。中。唯。今。茶。上。の。人。お。預。了。了。梅。念。の。心

水使者と申すは、もろろくヤヤク。使者、ちかよ復命す
太守と仰ぐ皆く、古き時、梅若、ある迷恨と、合し
と云ふ。其事、しづか、支、の下司、命有、く陣、す、ゆ、り、か、く
某郡某村何某と云老百姓と、詳、小、尋、出、し、急、き、梅、若、の、許、人
と、割、て、と、ら、ぬ。彼、を、百、姓、の、思、慮、の、か、く、石、中、云、出、ぬ、事、乃
狭、く、成、て、い、ふ、る、憂、き、目、を、も、ら、る、後、と、色、と、失、し、梅、若、の、許、
至、り、く、大、吏、ら、ら、る、く、長、押、一、呼、上、先、茶、を、與、一、く、と、老、百、姓
の、胸、裏、で、茶、の、唯、よ、り、の、故、く、大、吏、出、く、叩、木、賊、列、と、嘲
す、い、ふ、海、を、な、ら、ぶ、云、ふ、世、思、入、く、頭、と、比、は、附、遠、き、と、云、ふ。大
夫、大、に、憫、の、場、と、事、を、め、我、師、傳、と、い、ふ、と、遠、く

木賊列の百作と云は、い、ま、未、藏、の、西、賊、と、列、す、事、か、一、下、
の、り、と、事、と、謂、き、一、何、と、列、と、云、ふ、と、向、し、く、彼、
者、は、人、心、地、つ、ま、相、も、思、ひ、う、ぬ、事、な、ら、ぬ。我、の、信、濃、國、の、民
も、そ、若、も、あ、ら、ぶ、乃、奈、心、の、麓、は、生、ら、る、若、き、と、云、ふ、木、賊、と、列、て、業、と
し、ゆ、る、と、い、ふ、守、の、殿、は、は、税、賦、に、召、ま、て、は、結、と、い、ふ、評、を、
は、の、治、り、の、あ、ま、に、い、ふ、ら、事、と、見、ゆ、き、の、身、は、奮、く、仕、馴、ら、
し、と、列、の、舞、ふ、と、い、ふ、相、い、や、と、い、ふ、と、云、ふ、一、に、木、賊、
列、と、誦、と、若、の、も、あ、つ、た、く、と、列、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
中、事、と、い、ふ、尋、常、の、草、を、め、り、い、ふ、木、賊、と、列、何、の、
か、と、い、ふ、と、上、一、裂、上、て、其、帆、は、い、ら、る、り、誦、と、誦、の、は、持、く

その事功夫する所ゆの年老屋を杖つき有りるの
梅の老女の能と舞んよ感する所有ゆの梅の
事有師の速は舞物と語る事多し
いよ頭打振その舞物もむいよ語る。舞の精樂を
つふふ今婆有るそ夫がしひ舞ひまを老女
の能乃妙と語るも。あゝ鬼神の能い何とて。云
微に至りあなま。いよ何の枝葉のりりて謡
曲の文章に時代遠と作。率合附會俗説とも胸づく
思て彼はの改の計も出来ぬ。進も是の慰
と事實の因ゆきりの非。白樂天と唐音も。詠く

れぬかの。只家傳の節墨譜と深く修練。其の舞
の優りると慕ひの志を。舞ひ舞ひよ師
傳乃書い。あなま。遠くおと需もよ。ば
舞妓物志似。丁もの。賤きもとの。に模
りて。貴人高位は。成へる。能
卑き乞丐の。見苦し。之
我ハ。心。舞。流
と。思。地。上。顔。と。低。て。良
涙と。拂。し。も。あ。る。く。り。も。り。く。は。な。り
いつら。あ。婆。も。え。く。は。失。ぬ。く。も。不。思。後。多



五 吉野の道世者依川田ヲ致と録す

城列淀の城士依川田昌俊ハ和歌の癖有て常ニ道信三貌沈
服と慕ひ心を公も渠ハ風流と憐む或時昌俊土産の一
尾ハをりて

折るハあつとも魚ニ有ま牛の角のハをりてまづと
よめて流るるまじらるる

魚の居れろりあつてあすのひらりろりの牛ハ角を
とほせし後ろりも並ろりハ顧みえし一年の花の影そ
芳野の花さほの影あつて後ろりもまづと

ううハ古ハ恥ぢる秀逸するて口ハ誦一筆どはつし
洛陽是がえハ巾乃價と貴くすると云けし高く雲の上
まで聞え敵感有て辱くも宸筆よハ歌と扇の端よあ
る子ねらちと更衣ちハ後ろりハ淀の城主ハ縁者ハ女官の
中清て送く送く縁と城主ハ悦び良しハ昌俊と呼出
かゝる冥加する事ハの儀ハハ家ハ貸よせよと賜るる
と昌俊頂戴して涙と流し言語もてやづき良しハあつて
ねてせ席と退きしハ私宅もゆび出でたの跡と聞け
ぬ城主とろり職ハの役者親類知音よをち送中ハ
きて索しよも終る者ハと知れ私歌ハ雅なるものあつて

功成名遂て退の旨意して道世ぐるやりの成りごとく
竹も風雅の名近國は郷者きぬ遠の法成僧吉野の山
踏見と六田山よりか登り斧心門をいつり跡を見
り御船山藏王堂と拜し猿の尾鷲乃尾は石も跡
椿山躑躅の園に時よをさるるあくも又あり彼田位
上人の汲水い昔法水ハ是より尋り常又かちりあり
後びる草は庵ありあがり疲れしとて去るの心ま
ハ七旬がりのを花乃歌ハ花は雪と敷きしるり出合とこ
あつと入ぬ深世は遠き心奥と云珠よは清水の
下は位よは水のうらまを濁る事と感一けはばいよ

あもゆもゆも草本ハ人のさざりていづれつきのあかしく
何れは活のひ春あがり心なきとらりたがらはずも
く共よよこし伸てゆをのき来門回士乃草鞋はまを
世山の昔の跡よは多く花は名を事先云出人磨り
目よをさるる古の代々の名茶は心入物くるふ近年休
川田何某の朝かくるん花の色多と増ゆるり都鄙りて
しゆるる後身ハ世のあき點歌てたをさるるも曾て聞
及ひゆるる喜傳ハ何れもあひあらん昔奇ハ定家ハの心
山まゝあはの如くともまよるる世も世も世も世も世も
と等類つてあはん

